

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。Copyrighted materials of the authors.

研究会基本情報

タイトル：「「もの」の人類学的研究(2) (人間／非人間のダイナミクス)」 (2016 年度第1回研究会)

日時：2016年6月11日 (土) -6月12日 (日)

場所：AA 研306号室

プログラム：2016年6月11日 (土)

報告者1：春日直樹 (一橋大、AA 研共同研究員) 「二つの真実の間で：フィジーの時間と物理学の時間」

報告者2：西井涼子 (AA研) 「民族誌記述の基点としての『もつれ髪』—ヒッピーからダッフ実践者へ」

報告者3：黒田末寿 (滋賀県立大、AA 研共同研究員) 「農鍛冶の鉄のうち方：循環する鍛冶物が木と土と人を語る」

2016年6月12日 (日)

報告者4:伏木香織 (大正大学、AA 研共同研究員) 「人形劇『ポテヒ』のトポロジー」

報告者5:丹羽朋子 (人間文化研究機構、AA 研共同研究員) 「窓花と儀礼的紙細工—「化する世界の「勢」 (布置) の顕現」

概要：

当日は2016年度の第一回目の研究会であるため、まず研究代表者の床呂郁哉 (AA研) より本年度の簡単な研究計画の説明と、いくつかの連絡事項のアナウンスを行った。その後、プログラムにある通りの計5名による報告が実施された。各報告に対して参加者全員によるディスカッションを行った。

各報告の内容は下記の通りである。まず春日は「二つの真実の間で：フィジーの時間と物理学の時間」と題して報告を実施した。その要旨は以下の通りである。

モノはそれ自身で実在すると考えられるのが一般であり、この性格によって他の何かの実在性を証するという役割をしばしば引き受けてきた。「呪物崇拜」のように証される実在に比して証するモノが卑小な場合などは、モノのこうした役割が否定されようが、モノが不可視で知覚困難な対象を実在させるということは、私たちの生活ではごく当たり前に行き来している。ラトゥールは科学的な確信が「呪物」ならぬ「ファクティッシュ」によって、ある実在 (群) を生み出す様子を描いている。本発表では、その科学実験で中核的な役割の一つを担う「時間」について、実在性をテーマ化する。ただし、これを従来の科学技術研究のように時計や実験装置をつうじて論じるのではなく、物理学内部での議論をオセアニアにおける土着的な一運動——「ヴィチ・カンバニ」と称される政治的・経済的・宗教的

な運動——と比較することをつうじて、明らかにするものである。

まずは、物理実験の前提とする「時間」の不可逆性が量子力学では裏切られてしまうようにみえるので、現代の理論物理はこの問題にふれないようにする、という周知の「解釈問題」を確認する。解釈問題は相対論化した量子論にとって立派な論題のはずだが、理論家はこれを回避する。物理学科で毎年数名の学部学生がこのテーマの卒論を書こうとしても、「やめておけ」と指導教官に止められる。理由は専門家になっても攻略の糸口がみえず、この問題の他にも解決の近そうな諸テーマが多々あるからである。

本発表では、分析哲学者ヒュー・プライスが解釈問題の解決に向けて提起した「逆因果作用」を紹介し、その成立条件である「接近不能な（観測できない）過去」を参照することによって、ヴィチ・カンバニ運動の不可解な性質を理解可能な対象として再提起する方向をとった。そのために、日本の物理学者渡部隼が50年代にころもみた思考実験を検討し、物理学が「遡言」でなく「予言」に適したかたちで実験を設定しなければいけないことをベイズ式によって確認した。これをつうじてヴィチ・カンバニ運動の不可解さそのものが、物理学者とわれわれの共有する「予言」偏重主義に由来することを明らかにした。

ヴィチ・カンバニ運動家の重視する「遡言」が「観察できない過去」によって成り立つのに対して、物理学は観察可能性という条件において「時間」の実在性を守りつづけているようにみえる。しかしながら、この見解は何よりも、物理学者が回避しつづける「解釈問題」によって揺るがされる。彼らは正論化できない観察不能性を前提としながら、実験による観察可能性をひたすら探究する。観察不能性という強力な根拠を得たがヴィチ・カンバニ運動が実質的な成果のないままに継続できたのに比べると、現代物理学は根拠が不確定でいられるほどに、めざましい成果を算出しつづければならぬ。

本発表は最後に、「時間」の実在性を否定する異端の物理学者の一人、ジュリアン・バーバーを紹介し、彼の提起する運動のグラフをアルフレッド・ジェルの解釈するマルケサス彫像と比較する。この比較は「時間」の実在性をいっそう不確定にするだけでなく、ヴィチ・カンバニ運動の長い歴史に関して別の観点を用意するものである。

二番目の報告者である西井は「民族誌記述の基点としての『もつれ髪』—ヒッピーからダッワ実践者へ」と題して報告を行った。その概要は下記の通りである。

チェンマイから北へむかって車で3時間のところに位置する山間のパーイという小さな町は多様な世界に生きる人々が共在する場である。パーイは「山岳少数民族、ムスリム、タイ人、ヒッピーの生き方がある。いろいろな色のファッションがある」と、パーイ在住のヒッピーはいう。「一人は真っ黒に全身を覆っている。一人はヒッピーで髪を長くしている。中国人観顧客もみんな一緒にいることができる。みんな幸せだ」という。ダッワはイスラーム復興運動の一つであり、女性は目だけだして全身を黒いヴェールで覆った服装が特徴的である。本発表では、ヒッピーからイスラームの回帰をめざすダッワ運動の実践者になった二人の夫婦の軌跡から、新たな自己生成のプロセスを描くこと

を試みた。そのとき、主体としての人間を人間中心主義的に描くのではなく、人間を含んだ環境、「もの」が絡まりつつ「人間的なるものを超えた」世界のあり方を偶然性のなかで描くために、彼らがヒッピーからダツワ実践者となったときに、切り落とした「もつれ髪」に着目した。

妻のポーンは39歳、バンコク出身、仏教徒として生まれ、高校を出て、看護助手をしたり、工場で働いたりしていた。仏教徒の男性との間に3人の男の子。結婚はしていない、ただ一緒にいただけという。長男は21歳で最近バイクの事故で死んだばかり。3男は3歳の時に死。夫とは11年前に別れた。

夫のファイサンは48歳、バンコクでムスリムとして生まれる。父はノンチョークでイمام。高等専門学校でセラミックを学び、皮製品のデザイナーとして大阪デザインという会社の仕事を2年間した。その後自分で会社をおこし8年間、その後食堂をバンコクのチャツチャック広場で8年間やった。卒業してすぐに結婚、初めの相手も仏教徒で、子供が男の子2人。20年ほど一緒にいたが、6年前に別れた。ポーンと出会った年。元妻は仏教徒にもどり、子供は父方の祖父母と暮らしてムスリムである。

彼らが出会い、仏教徒だった妻がイスラームに改宗してついにはダツワ実践者となった生の軌跡を、インタビューから、なれそめ、旅、別れ、パーイでのダツワの訪問、悪霊払い事件、ポーンの改宗、「もつれ髪」を切る、神の導き、結婚、髪を隠すといった項目にそって描写した。そのとき、記述する人類学者の存在・視点はどうのように民族誌記述に織り込まれていくのかについても考察した。

3人目の報告者である黒田は「農鍛冶の鉄のうち方:循環する鍛冶物が木と土と人を語る」と題して報告を行った。その概要は下記の通りであった。

1 はじめに

農耕や山仕事でつかう鋏・鎌・鉈・斧などをつくる鍛冶を農鍛冶または野鍛冶と呼ぶ。1972年には全国の農鍛冶は3800戸余を数えたが(佐藤1979)、その後、ほとんどが廃業ないし小規模鉄工所になり、ごく少数しか残っていない。

報告者(黒田)は1999年に上田洋平さんの紹介で滋賀県多賀町在住の農鍛冶Mさんに出会い、技術のごく初歩を学ぶと同時に、かつて鍛冶業がさかんだっころの様子や鍛冶に関することがらを上田さんたちと聞きとりした。そこからMさんがどのように鍛冶をしたか、Mさんと使用者にとって鍛冶物がどのように作用しどういう意味をもっていたかを検討する。

2 鍛冶技術の基本と鋏

2.1 鍛冶と鍛鉄

熱した鉄をハンマー等で打つと不純物が除かれ結晶方向がそろうなどの作用で強度を高める。鍛冶はこの作用を利用しつつ成形して鉄製品を製造する作業である。鍛冶でもちいる鍛鉄は、炭素含有量1.5%以下で、炭素の少ない地金と炭素の多い刃金に分かれる。刃金は焼入れ、焼戻しで堅さ・もろさを調節できる（朝岡1998）。農鍛冶はこの2種類を組み合わせる刃金づけで優れた農具を制作・修繕し、近代以降の農林業を支えた。

2.2 火作り・刃金づけ

鍛冶の基本作業は、火作り（＝加熱・槌打ちで変形・加工する）、刃金づけ、焼入れ・焼戻しである。加熱には火床・鞆・コークスを使う。コークス以前は鍛冶炭を使った。

刃金づけした刃では、使用や研ぐことで地金部分が摩耗し後退する一方で刃金部分が残るため鋭角の刃先が維持される。焼き入れは、600-700℃に熱した鍛鉄を急冷して硬くする技術だが、そのままだと脆くなってしまうため、さらに低温に熱してゆっくり冷まし粘りをつける（焼戻し）。

2.3 農鍛冶がめざした鋤作りと先掛け

鋤は作物の植え付けに先立つ地ごしらえにもちいる農具であり、作業効率をよくするためにさまざまな土壌条件に合わせた多種がある。農民は個人用・特定土壌・特定用途の鋤を農鍛冶に注文し（山中 1979）、農鍛冶はよく土が切れ、衝撃にあっても刃が欠けない刃先の農具制作に努力を傾注してきた（佐藤 同）。摩耗した農具の刃を鍛冶で直すことを先掛けという。これにより農具の修繕・改善がなされ、鍛冶・農民・土地・作物・森林の間を農具が行き来した。

3 聞き取り・観察・学び

3.1 フィールドとMさん

滋賀県犬上郡多賀町のMさん（1920年生まれ、故人）の鍛冶場

Mさんは16歳から京都の自動車修理工場務め当時の最新技術と機械鍛冶を習得したのち28歳で農鍛冶の娘さんと結婚、家業を引き継ぎ50年あまり続けた。

3.2 報告者（黒田）の鍛冶体験

報告者は1999年頃から2年間断続的に火作りを教えてもらった。刃金づけまで進んでいない。熱した鉄は打つと伸び、簡単に変形できる。ハンマーが鉄を打った瞬間、鉄の伸びぐあいの感覚が手に伝わる。しかし冷えると鉄はがんと反発し、熱い鉄でも打ち損ねるとひび割れたりねじれる。目的の形を段階段階で思い浮かべながら力まず正確に打つことが肝心で、そのためには鉄を火ばしで挟みもつ左手の握りと位置に気をつけ、右手のハンマーに体でリズムを作るなどの要領がわかってきた。

3.3 Mさんの鍛冶仕事

- ・仕事は親方の手伝いで見て覚えた。親方の死後は一人で鍛冶をした。
- ・最盛期には年に4回、近隣の村を自転車（後にバイク）で巡回し先掛けした農具を配り集金した。
- ・修理にもどってきた農具を見て相手の用途に合わせた作りができてなかったとわかり、「お恥ずかしい仕事をしたなあ」と反省する毎日だった。
- ・欲を出すといいい仕事にならない、欲が起こりかけたら念仏を唱えながら打つ。Mさんは脚と槌でリズムをとりながら槌打ちをする。念仏もおそらくリズムの調整になっているのだろう。
- ・現在（1999年当時）は鍛冶で作ったものに採算がとれる代金をもらうわけに行かないので、店で買ってきた物を直してあげるとか、どうしてもというのを奉仕の気持ちで引き受けている。
- ・初めての顧客に対しては、道具を使う場所・用途・柄の角度の好みなどを聞き、世間話と様子で性格や利き手の使い方を判断して焼きや刃の形状を調整する。先掛けに戻った道具をみるとどう使ったかが大体わかるし、本人からも聞いて形状を修正する（これは農鍛冶一般に共通した：佐藤 1983 p305-306）。何年もすると、自分の調整が向上し、相手も上手になっていることがわかる。

この鍛冶・農具・使用者に生じる向上のサイクルは、Mさんの土地と農林作業と鍛冶の知識がベースとなり、自己の仕事は不完全というMさんの農具と顧客に対する謙虚さが廻転力になっている。このサイクルの中で農具は木と土と人を語るののである。

6月12日の最初の報告者の伏木は「人形劇『ポテヒ』のトポロジー」と題して東・東南アジアに跨る人形劇「ポテヒ」の伝播と現状などをめぐって報告を実施した。その概要は以下の通りである。

人形劇「ポテヒ」は中国・福建省にルーツをもつとされる指人形劇である。現在では中国以外に、台湾で「台湾文化」として確固とした地位を築いているほか、マレーシア、シンガポール、インドネシアなどでも上演される。しかしながら、この人形劇の「カタチ」は多様で何をもって「ポテヒ」と呼んでいるのかが定かではない。そもそも布袋戯と書かれる人形劇を「ポテヒ」と呼ぶのも、文字を失って音だけで人形劇を伝えた人々がこう呼び習わすからである。戯棚、人形、物語、音、上演形式、四聯白、担い手、宗教的なもの、上演空間、時間などの情報から、それぞれに大きく異なる「ポテヒ」がそれでも「ポテヒ」であり続けるということ、どのように語ることができるのか。つまり「ポテヒ」とは何か、をどのように語ることができるのかを問う。

その際、本発表では、徹底的に「もの」と「こと」の次元にとどまることとした。理論的枠組みを優先させることへの誘惑をたち、循環論の罠に陥らないようにするためである。そもそも論、原則論から「ポテヒ」を語らずに、現象を語れるだろうか。また「〇〇をし

て～せしめる」という擬人法に陥らずに「もの」とそのエージェンシーの関係性を語る事ができるか。さらに、それらの「もの」や「こと」を布置して、決して完成することのないネットワークから、普遍性のように立ち現れている「もの」の全体（具象、イメージ、Sign、?) は見えるだろうか。

それぞれの情報を布置し、その部分と部分のつながりと断切のネットワークを示すことで見えてきたのは、時間と空間のパズルとその全体は捉えきれないという事実であった。「モノ」は消失／「もの」は変容、あるいは「もの」は転がり続ける。結局、ワタシは何を見ているのか？空や不在ではなさそうであるのでドーナツの穴とは言わないが、カタチは見えない。普遍性のように立ち上がる「ポテヒ」の性格はトポロジーとしかいいようがなさそうである。

今回の研究会の最後の報告者となる丹羽は、「窓花と儀礼的紙細工-「化」する世界の「勢」（布置）の顕現」と題して報告を実施した。その概要は下記の通りである。

本報告は、中国陝西省北部（陝北）地域において、紙の造形物という「モノ」が「天地」に宿る諸力の顕現を媒介することに焦点を当て、黄土高原の農村暮らしや儀礼をめぐる民族誌的記述の考察を通じて、中国的コスモロジーである「陰陽合一」をとらえ直すことを目的とする。具体的には、「もの人類学的研究」第1期に報告した紅い剪紙に関する拙論および、中国の神鬼や風水に関する先行研究を批判的に検討した上で、そもそも「<紅事>（婚礼・春節）と<白事>（葬礼）双方で紙の造形が重要な役割を担うのはなぜか」「紙の造形はいかにして形＝力を得るのか」を根本的な問いとして、（1）病送りの儀礼等で用いられる^{ワウワ}娃娃（子ども）形の切り紙および、葬礼で供えられ墓上で燃やされる日用品を模した紙細工「紙火」や「紙銭（鬼票）」、さらに（2）老女たちが手がける、陰陽合一を表す吉祥図案や伝説を描いた剪紙について論じた。

陝北農村では、「招魂」や「送鬼」等の民間療法、あるいは村全体の厄払いのため陰陽師が土地神を交代する儀礼「安土神」^{アントウシエン}など、各種の「正常」を取り戻す方策が行われる。そこに登場する「神」や「鬼」^{グイ}（死者の靈魂）は、場所を移動しながら勢いを増減して転生する存在と見なされ、物理的な（だが不可知の）力として感知されて、各儀礼において^{ワウワ}娃娃（子ども）の切り紙が焼失することで、力の離散が可視化される。このような力は、人間を取り囲む世界から発せられる非人格的な「力」の現れ一箭内匡がファン・フェネップの「ダイナミズム」概念から論じる「述語的な力」一として理解し得るものである（箭内 2016）。当地域にはまた、春節に竈洞の内外に神や鬼を文字やかたち（神像）で表した紙を貼り、適所に「安」（配置）する習慣があり、人々はこれらの紙細工を貼ることで、神鬼の力を封じ込めたり、力を増長するよう再配置したりする。天・地・人、或いはあの世とこの世といった、陰陽の端境に置かれた紙は、一つの「標識」となって、陰陽の間に切断線＝結節線を引く働きをもつ。

ここで注目されるのは、F.ジュリアン（2004）による、ディスポジション（事物の布置）から表出する力の動き＝「勢」の論理をめぐる議論である。中国では古代より万物流転する世界が常態とされ、戦場での軍隊の配置（形勢）から書の文字や描かれた風景が示す配置（筆勢）といった「形状の中に働く潜勢力」に着目し、両極にある事物が「交替」することでいわば自然に趨勢が進展すること、そのような布置から発する“勢い”を戦略的に利用して、最大の効果を生むようにする技法が考案されてきたという。この指摘は、当地の老女たちが切り出す、男女合一、あるいは龍が男児に、龍が黄河に「化」す、不可思議な図案の剪紙の理解にとって非常に示唆的である。これらの剪紙はしばしば「生生不息」と説明されるが、この語は単なる子孫繁栄等の象徴的意味を超えて、「陰陽」二極間の布置から生み出される力＝「勢」による生成変化（「化」す）を意味し、老女たちの剪紙はこの動き（運動）そのものを、かたち＝素材の布置をもって表していると考えられる。

このような観点から、〈白事〉（葬礼）において、紙細工が風になびいたり、大地にばらまかれたり、墓上で燃やされるあり方に着目してみると、各々の紙細工はむしろ、風や土や火と「化」す一物質が離散して凝集（別のものへの再統合）する一「出来事」そのものであり、神・鬼・人に向けて異なる紙の色や、楽隊や爆竹の爆音、女たちの泣き声が儀礼の中で場所を移動しながらその時々空間を占め、不可知の力を顕在化させる様子が見えてくる。

以上のような事例分析を通じて、黄土高原における紙細工とは、「陰陽合一」＝陰から陽へ、陽から陰へと変転する動きそれ自体（男女から子が生まれ、人が生きて死に、あの世とこの世が交替しながら存立し、天と地の間で神鬼と人が力をめぐって交渉する……）から生まれ出る力を顕現させ、生成変化し続ける世界を写す媒体であり、物質を伴って一時的に空間の布置を構成し、さらにそれ自体が形として陰陽合一の布置を表し得ることによって、紙細工は陰陽を切り結ぶ線を引く定点となりうる「モノ」だと考えられる。

質疑応答では、中国的コスモロジーの認識論という狭い文脈を超えて、例えば親族関係や、個人と身体の関係も含めた論へと展開することによって、「陰陽合一」を中国における存在論として描き直す可能性等について議論がなされた。また、紙の儂い物質性により深く着目し、デュラビリティや燃えて消失することに力点を置いてはどうかといった、様々な意見や助言が得られた。